

ごめんなさい、が言えなくて。

作：向田邦子  
脚本：清水曙美  
演出：石井ふく子

出演：若尾文子 長山藍子  
三田村邦彦 松村雄基 熊谷真実  
田口守 別府康男 渡辺陽子 諏訪ひろ代 小西雄

〈公演日時〉 2011年11月29日(火)〈午前の部〉11:30開演/〈午後の部〉15:30開演  
11月30日(水)〈午前の部〉11:30開演/〈午後の部〉15:30開演

〈会場〉 新国立劇場 中劇場

〈料金〉 S席 8,000円 A席 5,000円(全席指定・税込)  
※未就学児入場不可 ※開場は開演の30分前

好評発売中

Produced by

希望の光が一日も早く  
灯されることを願う  
毎日でございます。

三月のあの日も私は三越劇場で  
「女の人さし指」の砂子を演じており  
ました。

多くの方々が震災に見舞われ私た  
ちも公演を中止することになりま  
した。刻々と知らされる被害の状況  
を見て、俳優を生業とする者の無力  
さを感じておりました。「俳優として  
何をなすべきか」「私にできること  
は。二人のお客様からその間に答  
えをいただくこととなりました。震  
災後、お二人は帰路を失い、劇場での  
避難を余儀なくされました。そして  
翌日の朝、「公演があるのであれば是非  
お芝居を見ていきたい!」とお  
申し出。十分な睡眠がとれず、お疲れ  
であるにもかかわらず、観劇をさ  
れたい。とお声を聞いて私にできる  
ことは「お客様がいらっしやる限り、舞  
台で演じ続けること」だと思いまし  
た。それから余震や停電が続く中、  
何とか三月二十一日まで砂子を演じ  
続けることができました。

そして、復興の兆しを求めて、この  
秋に「女の人さし指」の上演が決まり  
ました。日本の多くの街で、ささやか  
な営みを求めて生きる女性たちの姿  
を、再び演じることができればと思っ  
ております。明日への希望を胸に演  
じ続けてまいります。

皆様と劇場でお会いできますこと  
を楽しみにしております。

若尾文子

## 【作品について】

### 慎ましやかに送る日常。

### さざ波が起こり、二人の女性の人生が変わる…

本作は向田邦子作品を多く手掛けた石井ふく子が、随筆集『女の人さし指』(文藝春秋)をタイトルに、向田作品から構成した舞台作品です。

今回、主演・おでん屋の女主人の砂子を演じる若尾文子は、かつて向田邦子のテレビドラマ作品に数多く出演しましたが、舞台出演は今回が初となります。砂子が想いを寄せる新聞記者・殿村の妻・みつ子を演じる長山藍子も向田作品の常連であることから、本作品は石井×若尾×長山で贈る向田作品の集大成ともいえます。若尾・長山の豪華競演にさらなる彩を添えるのは、三田村邦彦、松村雄基、熊谷真実など、まさに華と実力を兼ね備えた俳優陣です。

何げない日常に光をあてながら人の心を細やかに温かく映し出す、向田邦子作品らしい物語となっております。この淡き物語を是非ともご堪能ください。



作  
向田邦子  
脚本  
清水曙美  
演出  
石井ふく子

出演  
若尾文子  
長山藍子  
松村雄基  
熊谷真実  
三田村邦彦  
他

音楽◎佐良直美 衣裳◎石井ふく子  
美術◎中村公一 照明◎室伏生大  
音響◎森本義 舞台監督◎姉帯修司  
演出助手◎盛田光紀 宣伝美術◎パーソウ  
協力◎伊藤裕子  
舞台製作◎加賀谷吉之輔  
主催製作◎シーエイティブロデュース

# 女の人さし指



〈日時〉 2011年 11月29日(火) 〈午前の部〉11:30開演/〈午後の部〉15:30開演  
11月30日(水) 〈午前の部〉11:30開演/〈午後の部〉15:30開演

〈会場〉 新国立劇場 中劇場

渋谷区本町1丁目1番1号 TEL:03-5351-3011

※京王新線(都営新宿線乗入)「初台駅」中央口(新国立劇場口)直結。

〈料金〉 S席¥8,000 A席¥5,000(税込)

〈チケット取扱〉 チケットスペース 03-3234-9999 チケットスペースオンライン 検索

CATチケットBOX 03-5485-5999

チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード 413-840) <http://pia.jp/t/>

ローソンチケット 0570-000-407/0570-084-003 (Lコード 31929) <http://l-tike.com>

CNプレイガイド 0570-08-9999 <http://cnplayguide.com/>

イープラス <http://eplus.jp> (PC&携帯)

【あらすじ】 おでん屋のカウンターの脇に、ぼつんと置かれた金魚鉢。新聞記者退職後に父が営んでいたおでん屋「次郎」。今は娘の砂子(若尾文子)が店を開けていた。訳あって、夫のもとを飛び出した砂子の妹・信子(熊谷真実)も手伝うこの店には常連の殿村(三田村邦彦)や折口(松村雄基)らが訪れる。殿村は砂子に恋心を抱き、砂子も淡い気持ちを寄せていた。しかし、彼には、みつ子(長山藍子)という妻がいた。